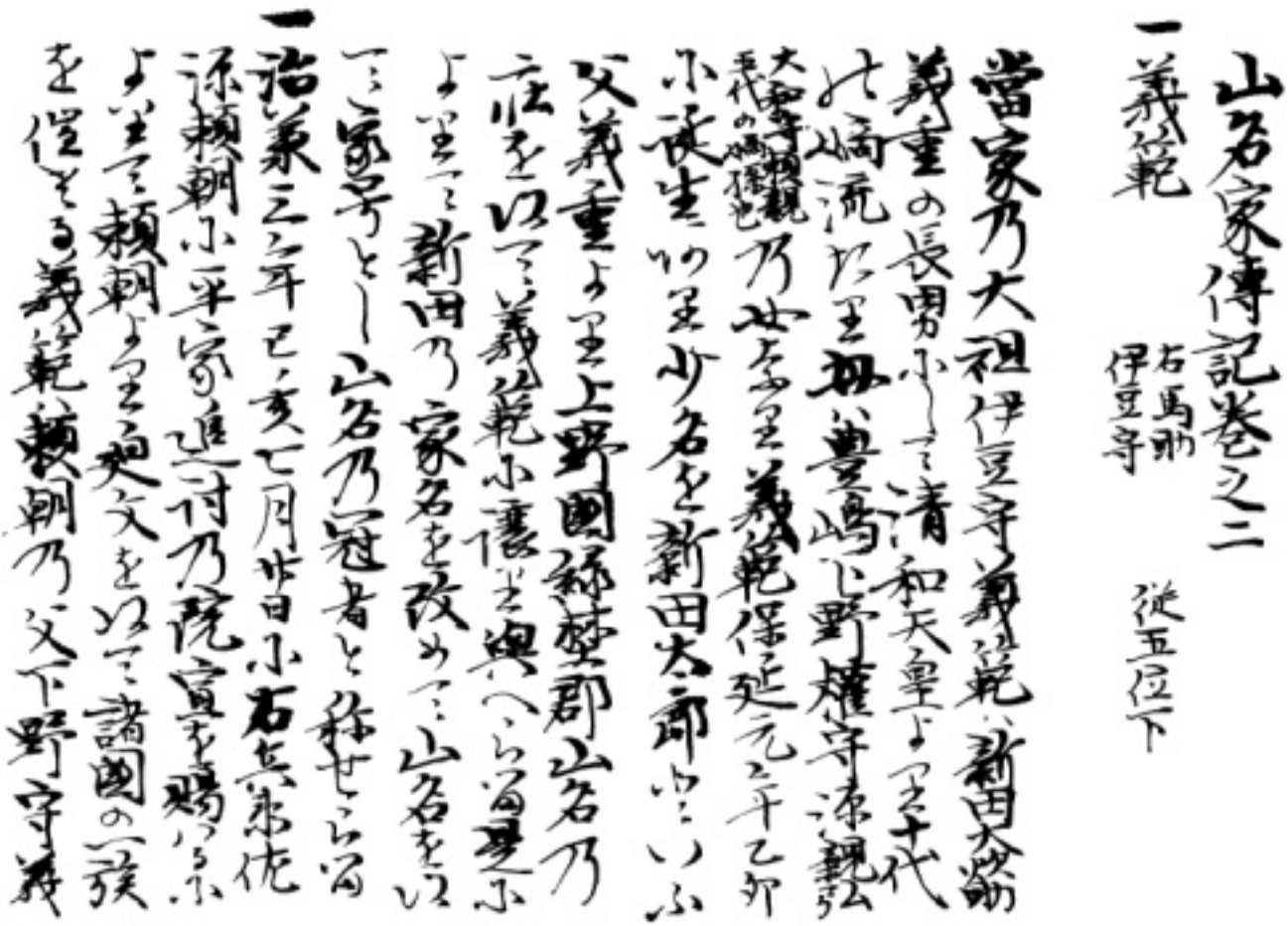
家譜

卷之二

但馬村岡
山名義路



山名家傳記巻之二

一、義範　右馬助　伊豆守　従五位下

当家の大祖伊豆守義範は新田大炊助義重の長男にして清和天皇より十代の嫡流たり母は豊嶋下野権守源親弘（大和守頼親五代の嫡孫也）の女なり義範保延元年乙卯に誕生あり少名を新田太郎という父義重より上野国緑埜郡山名の荘を以て義範に譲り与えらる是によりて新田の家名を改めて山名を以て家号とし山名の冠者と称せらる

一、治承三年己亥七月廿日に右兵衛佐源頼朝に平家追討の院宣を賜わるによりて頼朝より廻文を以て諸国の一族を催さる義範は頼朝の父下野守義

一、義範　右馬助　伊豆守　従五位下

当家の太祖伊豆守義範は新田大炊助義重の長男にして清和天皇より十代の嫡流（正当な血脈）なり。母は豊嶋下野権守源頼弘（大和守（源）頼親の五代嫡孫）の娘なり。義範は保延元年（１１３５）乙卯に誕生。少名を新田太郎と言う。父義重より上野国緑埜郡山名の庄を譲り受け、これより新田の家名を改めて、地名を以て家号年山名の冠者（階位六位で無官の人）と称される。

一、治承三年（１１７９）己亥七月二十日に右兵衛佐源頼朝が平家追討の令旨を賜り、廻文を回して諸国の源氏一族に参陣を促す。

朝とは正しき再従弟たるを以て最初に伊豆国に赴きて平家追討の評定に相預らる同四年庚子十二月十二日に頼朝鎌倉の大倉郷の新造の館に移従あり時に義範其従弟足利冠者と一列にして供奉たり

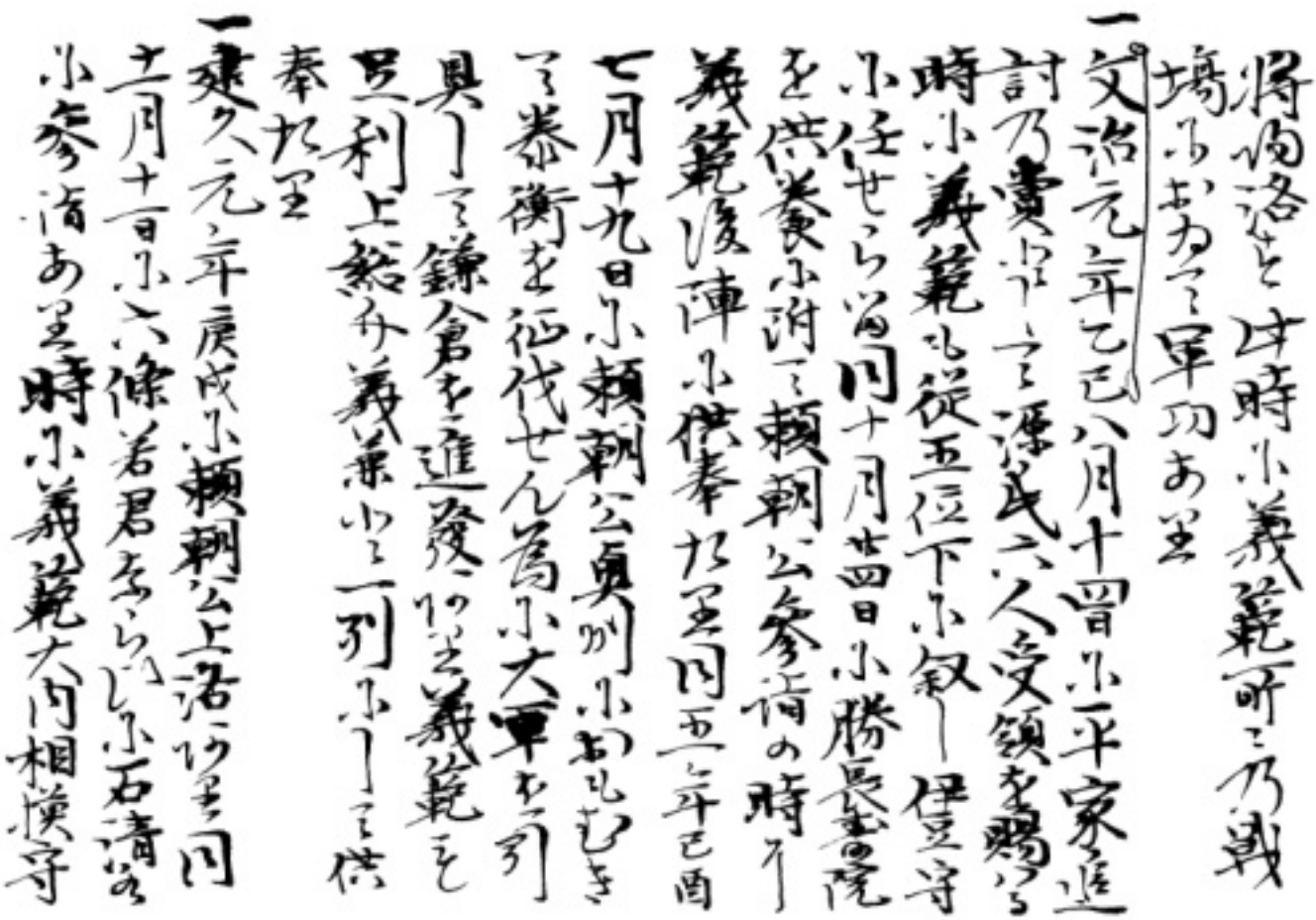
一、寿永三年甲辰正月に平家追討の為に蒲冠者範頼九郎義経両大将として上洛あり同月十日に院参あり同二十九日に京都を発し二月五日に摂州にいたる此時義範は搦手の大将九郎義経に相従わる

一、元暦二年乙巳三月十六日に渡辺神崎において勢揃えありて讃岐国八島に押寄て合戦あり終に同月廿四日に平家の一族を討滅して源家の諸

義範は頼朝の父下野守義朝とは再従兄弟の関係でもあり、いち早く頼朝がいる伊豆国に駆け付け、平家追討の評定に加わる。治承四年（１１８０）庚子十二月十三日に頼朝は鎌倉大倉郷に館を構え（大倉御所・鎌倉市二階堂）、新居に移る時、義範は従兄弟の足利冠者（義兼）と共に行列に加わりお供する。

一、寿永三年（１１８４）甲辰正月に平家追討の為に蒲冠者（源）頼範（義朝六男）、九郎（源）義経を両大将として上洛。同月十日に上皇の御所に出向く。同二十九日に京都を出て三月五日に摂州に至る。この時、義範は搦め手（敵の背後や弱点を突く）の大将九郎義経の下に従う。

一、元暦二年（１１８５）乙巳三月十六日に、渡辺津（旧淀川河口の天満橋周辺）神崎湊（尼崎市尼崎駅周辺）に源氏の軍勢が集結し、水軍の加勢を得て讃岐国の八（屋）島に押し寄せて合戦（屋島の戦い）があり、同月二十四日に壇ノ浦の戦いで平家一門は敗れて、源氏の諸将は帰洛する。



将帰洛す此時に義範所々の戦
場において軍功あり

一、文治元年乙巳八月十四日に平家追
討の賞として源氏六人受領を賜わる
時に義範も従五位下に叙し伊豆守
に任ぜらる同十月廿四日に勝長寿院
を供養に附て頼朝公参詣の時に
義範後陣に供奉たり同五年己酉
七月十九日に頼朝公奥州におもむき
て泰衡を征伐せん為に大軍を引
具して鎌倉を進発あり義範も
足利上総介義兼と一列にして供
奉たり

一、建久元年庚戌に頼朝公上洛あり同
十一月十一日に六条若君ならびに石清水
に参詣あり時に義範大内相模守

この間に義範は数々の戦場
において軍功を挙げる。

一、文治元年（１１８５）乙巳
八月十四日平家追討の恩賞
として源氏（の将）六人が
受領（任国を授かる）また、
義範は従五位下に叙せられ
伊豆守に任命される。
同年十月二十四日に勝長寿
院（源義家等を供養する為
に建立された寺）の落慶法
要に頼朝参詣。義範も後陣
につき参詣のお供をする。
文治五年（１１８９）己酉
七月十九日、頼朝は奥州の
藤原泰衡追討の為、大軍を
率いて鎌倉を出立。義範も
足利上総介義兼と共に従軍。

一、建久元年（１１９０）庚戌
に頼朝公、千騎の御家人を
伴い上洛。同十一月十一日
若宮八幡（源頼義造営）及
び、石清水八幡宮に参詣の
時、義範は大内相模守惟義
に列してお供をする。

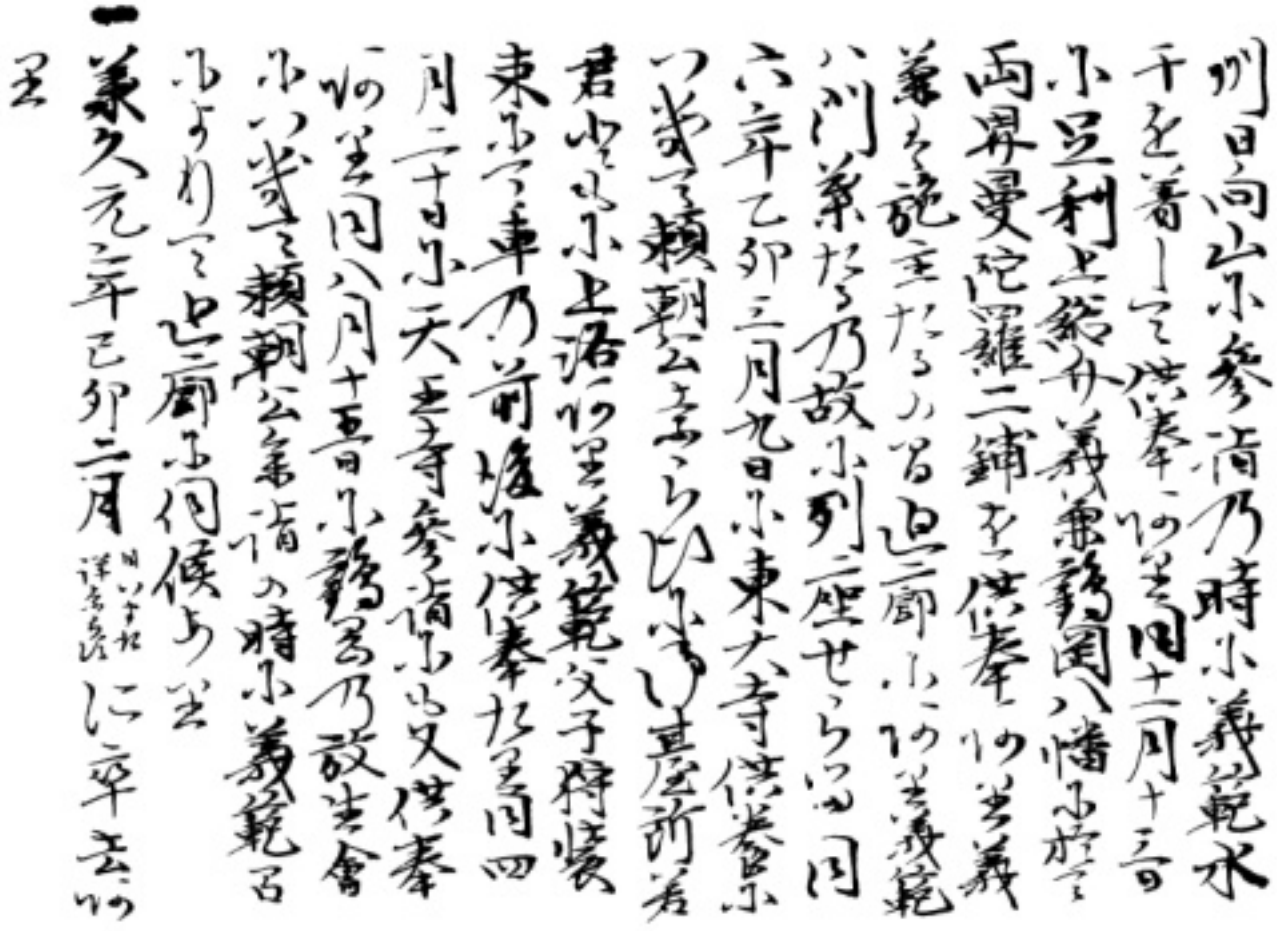
惟義一列にして供奉あり同二年
辛亥四月四日に頼朝公二所参詣の
時に供奉たり同三年壬子十一月廿五日に
永福寺供養につきて頼朝公参詣
あり時に義範布衣にて供奉たり同
十二月五日に浜の御所に於て諸将を
召されて頼朝公自ら千幡君を懐きて
出御あり各心を一にして此嬰児の
将来を守護すべきの由を慇懃
に仰ありて御盃を賜わる此時に
義範足利上総介義兼と同じく
着座ありて是を領掌し御太刀
を献ぜらる同五年甲寅二月二日に
北條義時の嫡男金剛丸元服あり
幕府において其沙汰あり時に義
範着座たり同八月八日に頼朝公相

建久二年（１１９１）辛亥四月四日の頼朝公、伊豆山権現。箱根権現の二所参拝に義範もお供する。

建久三年（１１９２）壬子十一月二十五日の永福寺落慶法要に頼朝公参詣の折、布（ほ）衣（い）（無紋裏地なしの狩衣）を着て参列する。

同十二月五日、浜の御所（北條時政の屋敷）に諸将が参集、頼朝公が千幡丸（三代・実朝）を抱いて現れ、「皆心を一つにこの子（実朝）を盛り立てるように」と親しく言われ杯を賜る。この時義範は足利上総介と同じく座に付き杯を頂き、太刀を献上する。

建久五年（１１９４）甲寅二月二日に北條義時の嫡男金剛丸（北條泰時・三代執権）が元服。（頼朝が仮親役になって）幕府によって儀式が行われ、義範も出席する。



州日向山に参詣の時に義範水干を着して供奉あり同十一月十三日に足利上総介義兼鶴岡八幡に於て両界曼陀羅二鋪を供奉あり義兼は施主たるの間廻廊にあり義範は門葉たるの故に列座せらる同六年乙卯三月九日に東大寺供養につきて頼朝公ならびに御台所若君ともに上洛あり義範父子狩装束にて車の前後に供奉たり同四月二十日に天王寺参詣にも又供奉あり同八月十五日に鶴岡の放生会につきて頼朝公参詣の時に義範召によりて廻廊に伺候あり

一、承久元年己卯二月日いまだ詳ならず に卒去あり

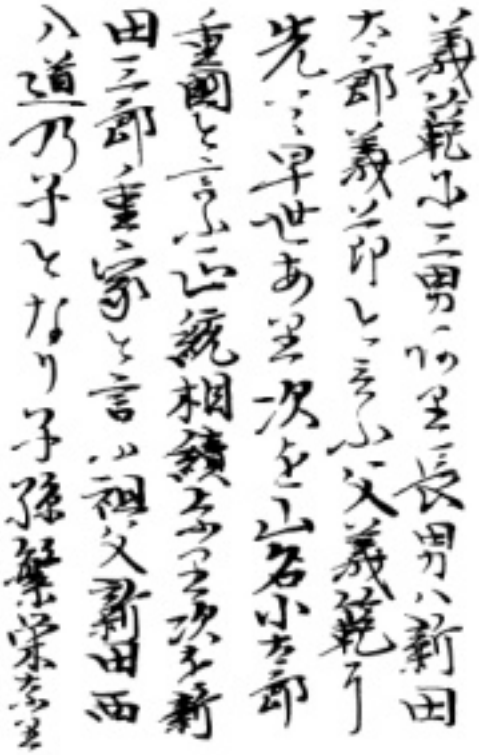
同八月八日、頼朝公が相州日向山（日向薬師か・伊勢原市）に参詣の際、水干（簡素な狩衣）を着てお供する。

同十一月十三日に足利上総介義兼が鶴岡八幡宮に両界曼荼羅二幅を奉納する。義兼は施主として回廊にあり、義範は御葉門の一人として、堂内にて着座。

建久六年（１１９５）乙卯三月九日に（平家によって破壊を受けた）東大寺の再建落慶法要が催され、頼朝公・御台（政子）・若宮（頼家）に付いて上洛。義範父子は狩装束（菱烏帽子に直垂、腰に毛皮を付け野太刀を指す）を着して先陣・後陣に分かれてお供する。

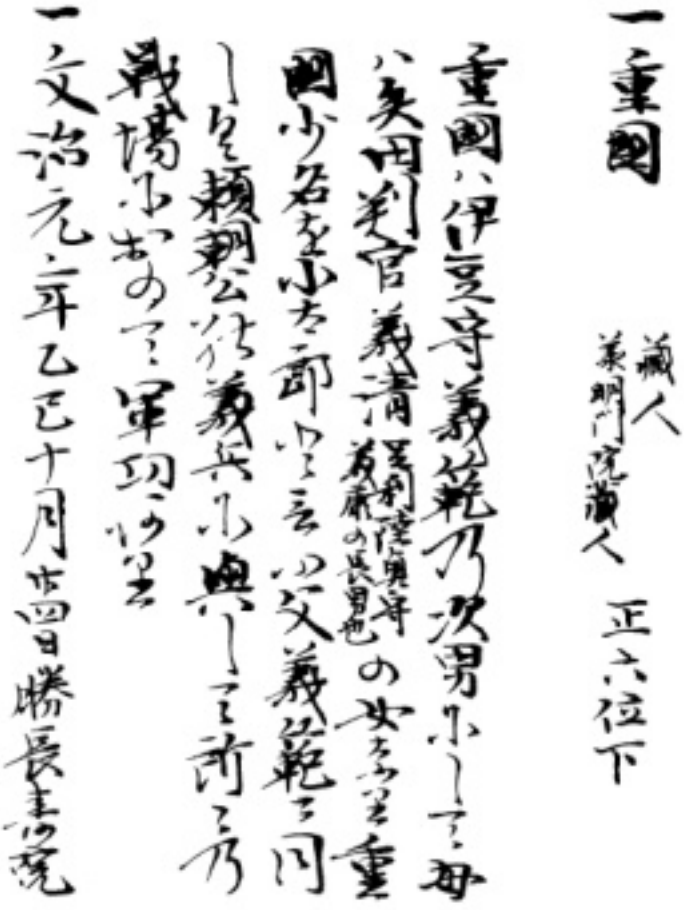
同四月二十日、天王寺参詣にお供。同八月十五日に鶴岡八幡宮での放生会に頼朝公参詣。義範もお呼びにより回廊にて奉仕する。

一、承久元年（１２１９）己卯二月（日は不詳）に逝去。



義範に三男あり長男は新田太郎義節と言う父義範に先て早世あり次を山名小太郎重國と言う正統相続なり次を新田三郎室家と言う祖父新田西入道の子となり子孫繁栄なり

義範に三男有り。
①長男は新田太郎義節（山名家二代）。父義範に先達ち早世。
②次は山名小太郎重国と言う。正統相続。
③次は新田三郎重家と言う。祖父・新田西入道（源義重）の養子となり、子孫繁栄。



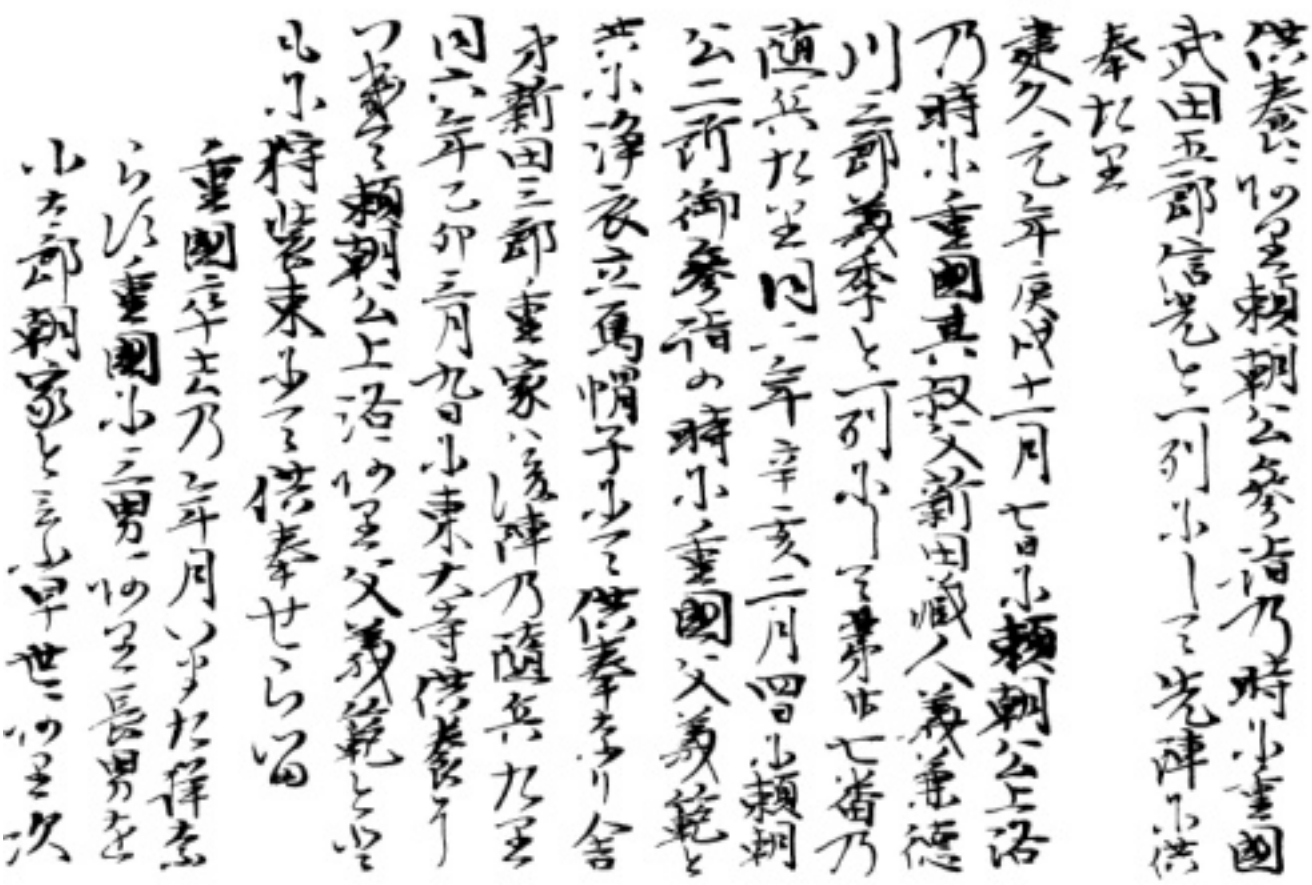
一、重國　蔵人　承明門院蔵人　正六位下

重國は伊豆守義範の次男にして母は矢田判義清（足利陸奥守義康の長男也）の女なり重國少名を小太郎と言う父義範と同じく頼朝公の義兵に與して所々の戦場において軍功あり

一、文治元年乙巳十月廿四日勝長寿院

一、重国　蔵人　承明門院蔵人　正六位下

重国は伊豆守義範の二男で、母は矢田判官義清（足利義康（祖父義重の弟）の長男）の娘。少名を小太郎と言う。父義範と同じく頼朝公の平家追討の義兵として従い、数々の戦場で軍功を挙げる。



供養あり頼朝公参詣の時に重國
武田五郎信光と一列にして先陣に供
奉たり

一、建久元年庚戌十一月七日に頼朝公上洛
の時に重國其叔父新田蔵人義兼徳
川三郎義季と一列にして第廿七番の
随兵たり同二年辛亥二月四日に頼朝
公二所御参詣の時に重国父義範と
共に浄衣立烏帽子にて供奉なり舍
弟新田三郎室家は後陣の随兵たり
同六年乙卯三月九日に東大寺供養に
つきて頼朝公上洛あり父義範とと
もに狩装束にて供奉せらる

重國卒去の年月いまだ詳な
らず重國に三男あり長男を
小太郎朝家と言う早世あり次

一、文治元年（１１８５）己巳十月二十四日勝長寿院での供養で頼朝公参詣の際、武田五郎信光（甲斐武田五代、妻は義範妹）と列して、先陣でお供する。

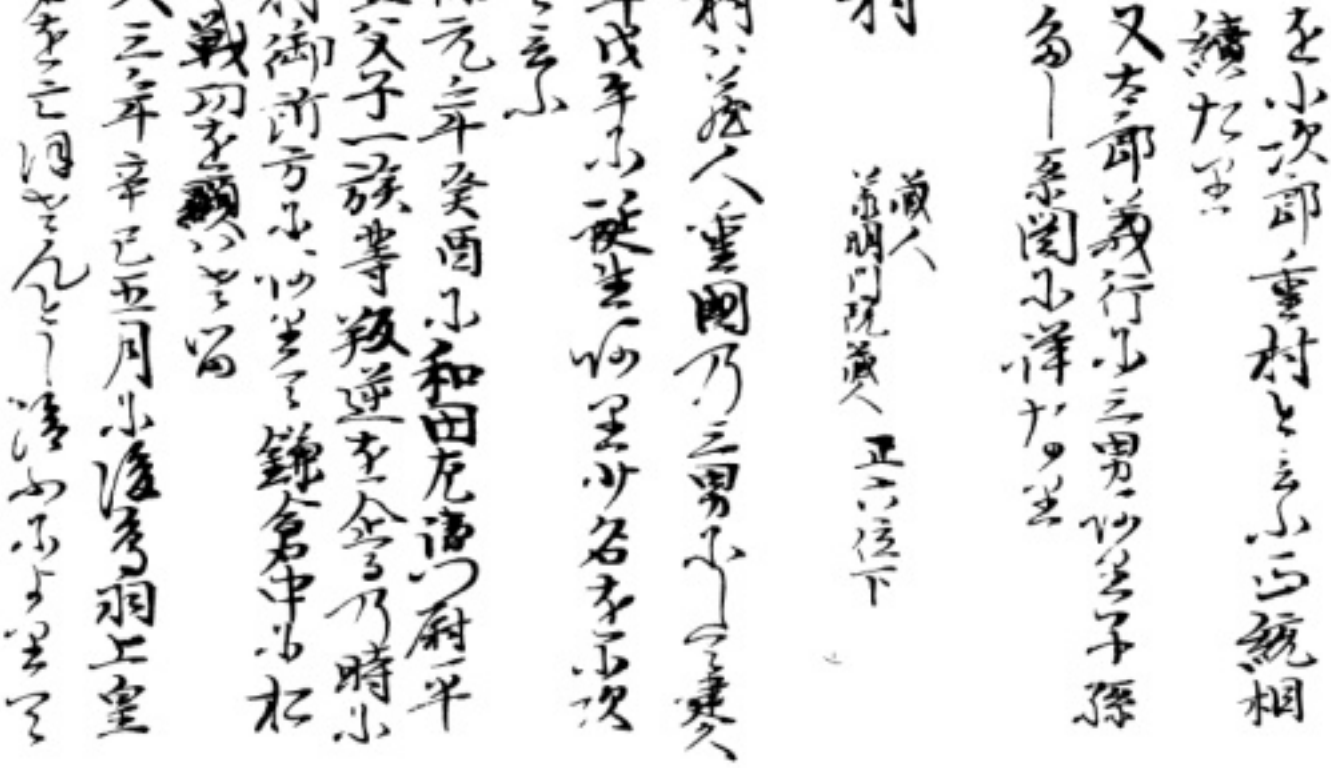
一、建久元年（１１９０）庚戌十一月七日に頼朝公上洛の時に重国は叔父の新田蔵人義兼、徳（得）川三郎義季（共に義範の弟）と、列して二十七番目の随兵とし出仕する。

建久二年（１１９１）辛亥二月四日に頼朝公、伊豆山権現・箱根権現の二所参拝の折、父義範と共に浄衣（儀式用装束）に立烏帽子姿にてお供する。舍弟新田三郎家重は後陣の随兵として出仕。

建久六年（１１９５）乙卯三月九日に東大寺供養の為、上洛。父義範と共に狩装束でお供する。

重国の逝去年月は不詳。重国に三男有り。

①長男は小太郎朝家と言う。若くして世を去る。



を小次郎重村と言う正統相
続たり
又太郎義行に三男あり子孫
多し系図に詳なり

一、重村　蔵人　承明門院蔵人　正六位下

重村は蔵人重國の三男にして建久
九年戊午に誕生あり少名を小次
郎と言う

一、建保元年癸酉に和田左衛門尉平
義盛父子一族等叛逆を企るの時に
重村御所方にありて鎌倉中に於
いて戦功を顕わさる

一、承久三年辛巳五月に後鳥羽上皇
鎌倉を亡ぼさんとし給うによりて

②次を小太郎重村と言う、
正統相続。
③太郎義行に三男有り、子
孫多し系図に詳しく記し
てあり。

一、重村　蔵人　正六位下
承明門院蔵人

重村は蔵人重国の三（二）
男で、建久九年戊午に誕生、
少名を小次郎と言う。

一、建元年（１２１３）癸酉和
田左衛門尉平義盛父子一族
等が反乱（和田合戦、和田
義盛と北條義時の争い）を
企て、重村は御所方に属し
て鎌倉での戦いに加わり戦
功顕著。

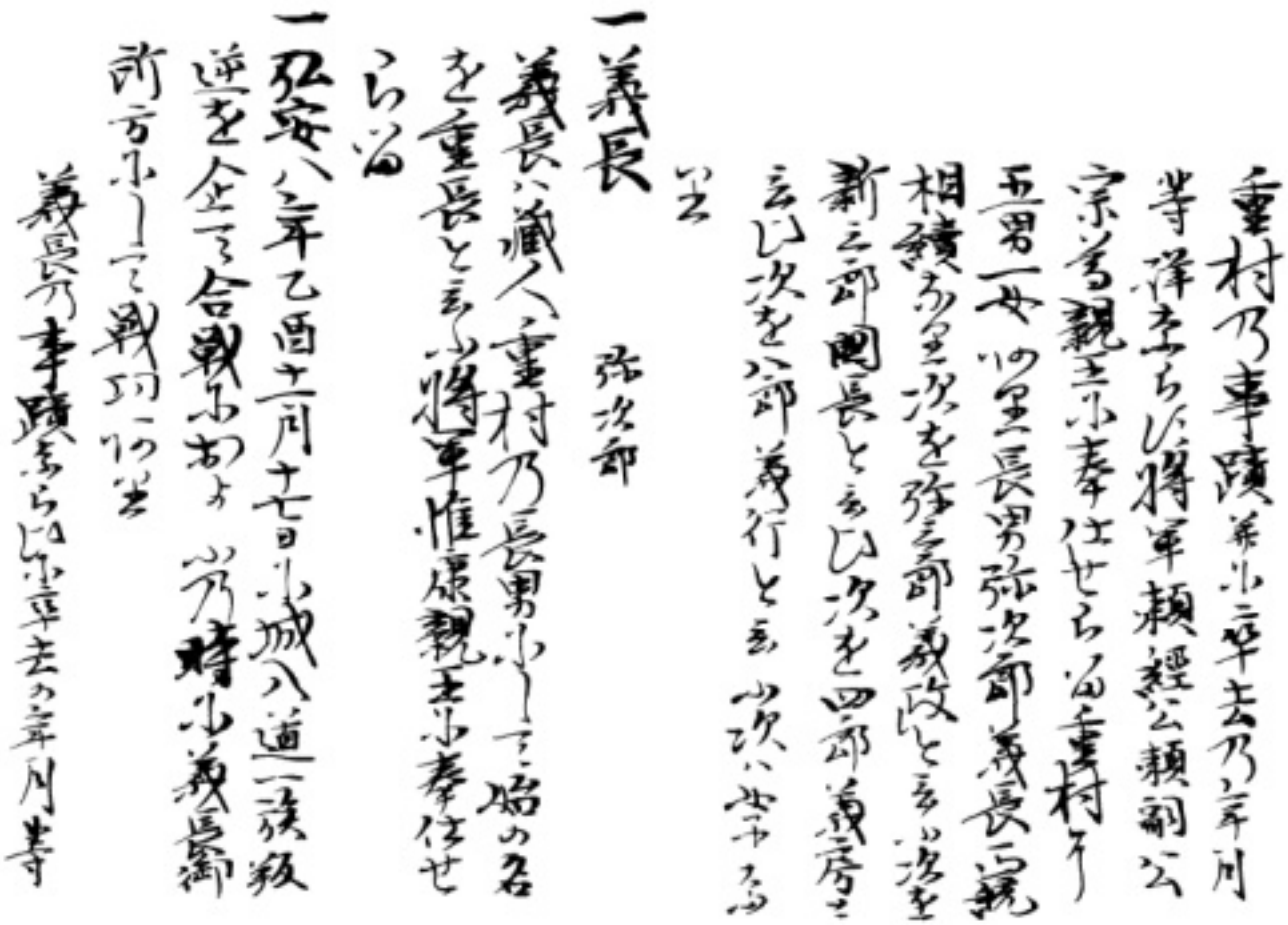
一、承久三年（１２２１）辛巳
五月に後鳥羽上皇が鎌倉幕
府倒幕を企て（承久の乱）、

関東より執権北條左京太夫義時が
下知として多勢上洛あり同六月
十三日に宇治勢多両所において合戦
あり官軍終に敗績して京方の
諸大将委く討死あり時に重村は
北條武蔵守泰時が陣にありて勢
多において勇を振い自ら敵二人を
討て其首を得らる時に重村二十四歳
なり

一、建長二年庚戌三月に閑院殿修造ある
によりて将軍頼嗣公より諸国の
地頭御家人に造営の事を仰付
らる時に押小路より南方西洞院よ
り西方筑地十八本の内一本を重村
に修造すべきの旨仰付らる是に
より氏族を召集てこれを造進あり

（幕府の（実権は北条政子））命を受けて執権北條義時が関東より多くの兵を率いて上洛。同六月十三日、宇治・勢（瀬）田の両所で合戦があり、遂には官軍が大敗を喫し、官軍の諸将は悉く討ち死にする。重村は北條武蔵守泰時（義時の子）の陣に属して勢（瀬）田に於いて勇敢に戦い、自ら敵二人を討ち取る。時に重村は二十四歳。

一、建長二年（１２５０）庚戌三月に閑院殿（大内裏外に設けられた仮御所、本来の大内裏は安貞元年（１２２７）に消失後、この頃は未だ再建されずにいた）の修造に付き将軍（藤原）頼嗣公から諸国の地頭・御家人に造営協力の命が出され、重村は押小路南、西洞院西の間の築地塀十八本の内、一本の造営を割り当てられる。一族を召集して、この築地塀を造営し献上する。



重村の事蹟井に卒去の年月
等詳ならず将軍頼経公頼嗣公
宗尊親王に奉仕せらる重村に
五男一女あり長男弥次郎義長正統
相続なり次を弥三郎義政と言う次を
新三郎國長と言い次を四郎義房と
言い次を八郎義行と言う次は女子な
り

一、義長　弥次郎
義長は蔵人重村の長男にして始の名
を重長と言う将軍惟康親王に奉仕せ
らる

一、弘安八年乙酉十一月十七日に城入道一族叛
逆を企て合戦におよぶの時に義長御
所方にして戦功あり

義長の事蹟ならびに卒去の年月等

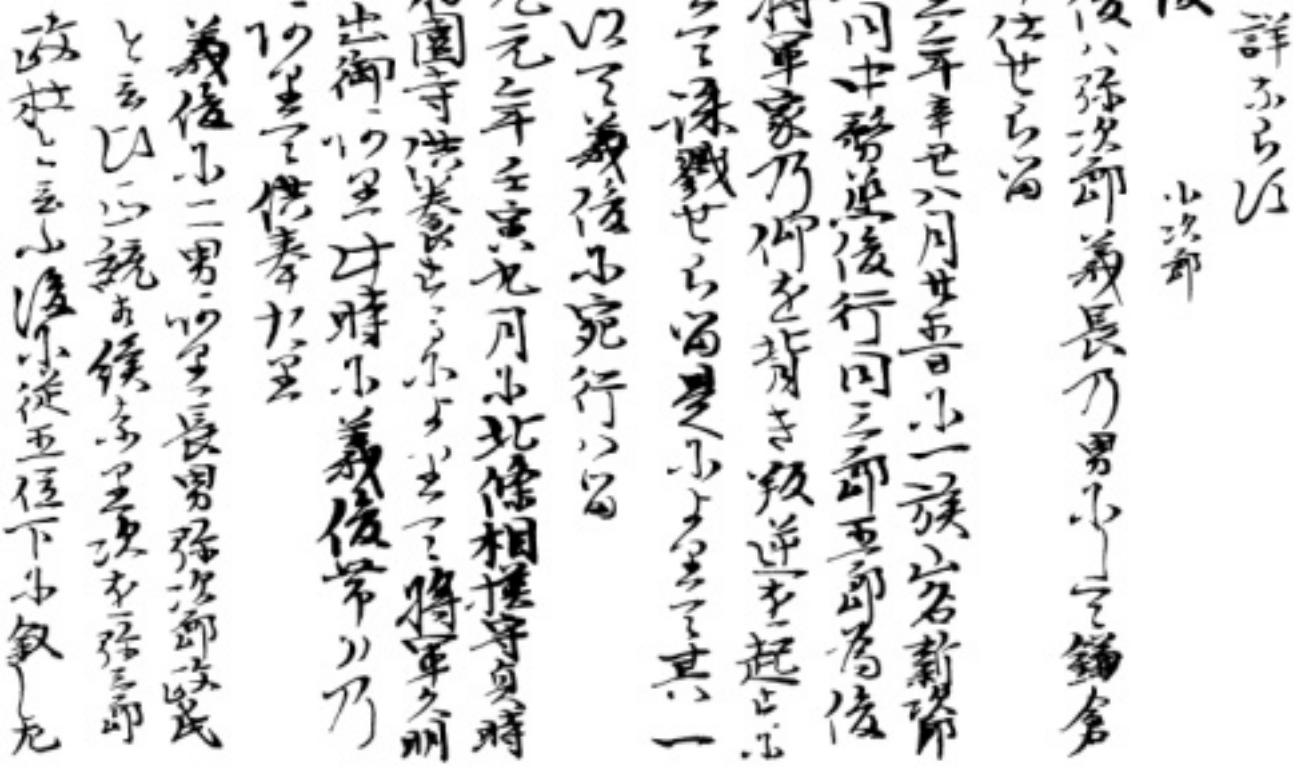
その他の重村の事蹟並びに逝去の年月等は不詳。
四代将軍頼経公（藤原頼経・九条家三男）、五代将軍頼嗣（頼経の子）、六代将軍宗尊（むねたか）親王（後嵯峨天皇の第一皇子）に代々仕える。

重村に五男一女あり。
①長男は弥次郎義長、正統相続。
②次は弥三郎義政。
③新三郎国長。
④次を四郎義房。
⑤次は八郎義行。
⑥次は女子。

一、義長　弥次郎
義長は蔵人重村の長男にして、始めの名を重長と言う。鎌倉七代将軍惟康親王（宗尊親王の子）に仕える。

一、弘安八年（１２８５）乙酉十一月十七日に、城入道（安達泰盛）が反乱を企て（霜月騒動）、合戦となる。義長は御所方に属して戦功を挙げる。

義長の他の事蹟並びに逝去の年月等は不詳。



詳ならず

一、義俊　小次郎

義俊は弥次郎義長の男にして鎌倉に奉仕せらる

一、正安三年辛丑八月廿五日に一族山名新次郎行直同中務丞俊行同三郎五郎為俊等将軍家の仰を背き叛逆を起すによりて誅戮せらる是によりて其一跡を以て義俊に宛行わる

一、乾元元年壬寅九月に北條相模守貞時最勝園寺供養するによりて将軍久明親王出御あり此時に義俊帯刀の列にありて供奉たり

義俊に二男あり長男弥次郎政氏と言い正統相続なり次を弥三郎政杜と言う後に従五位下に叙し左

一、義俊　小次郎

義俊は弥次郎義長の息子にして、鎌倉幕府に出仕する。

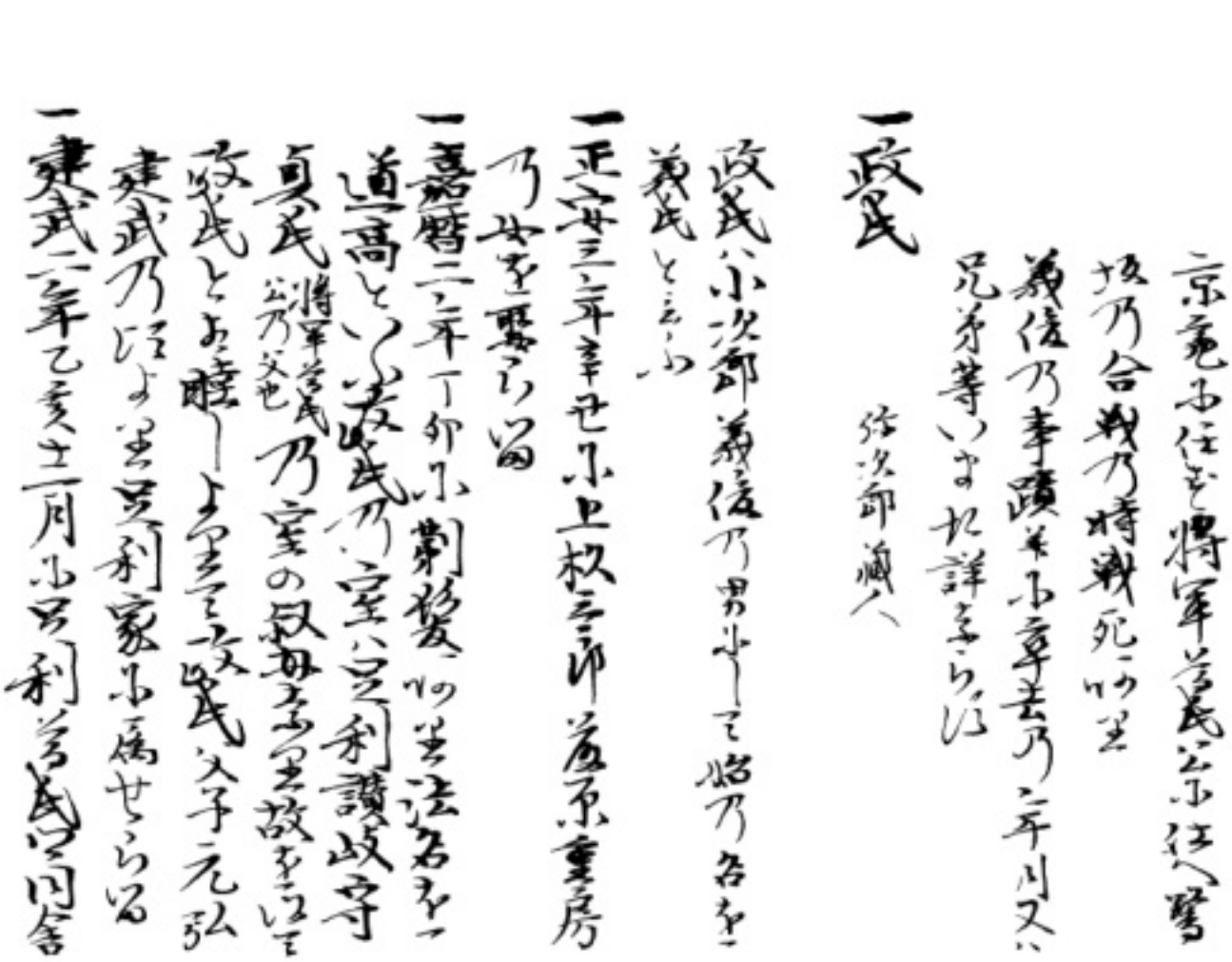
一、正安三年（１３０１）辛丑八月二十五日に一族の山名新次郎行直、同じく中務丞俊行、同じく三郎為俊等、将軍の命に背き叛逆を起こすに依り死罪に処せられる。その跡目は義俊に当てがわられる。

一、乾元元年（１３０２）壬寅九月に北條相模守貞時が最勝園寺供養を催し八代将軍久明親王（惟康親王の子）お出まし有り、この時義俊は帯刀し列してお供する。

義俊に二男あり。

①長男弥次郎政氏、正統相続。

②次を弥三郎政杜と言う。後に従五位下に叙し左京亮に任命される。室町将軍（足利）尊氏公に仕え、鷺坂の合戦（愛知県豊川市か）で戦死する。



京亮に任ず将軍尊氏公に仕え驚
坂の合戦の時戦死あり
義俊の事蹟并に卒去の年月又は
兄弟等いまだ詳ならず

一、政氏　弥次郎　蔵人

政氏は小次郎義俊の男にして始の名を
義氏と言う

一、正安三年辛丑に上杉三郎藤原重房
の女を娶らる

一、嘉暦二年丁卯に剃髪あり法名を
道高という政氏の室は足利讃岐守
貞氏（将軍尊氏公の父也）の室の叔母なり故を以て
政氏と相睦しよりて政氏父子元弘
建武の頃より足利家に属せらる

一、建武二年乙亥十二月に足利尊氏卿同舎

その他の義俊の事蹟並びに
逝去の年月は不詳。

一、政氏　弥次郎　蔵人

政氏は小次郎義俊の息子にして、始めの名は義氏と言う。

一、正安三年（１３０１）辛丑に上杉藤原重房（上杉氏の祖）の娘を娶る。

一、嘉暦二年（１３２７）丁卯に出家し法名を道高と言う。政氏の妻は足利讃岐守貞氏（将軍尊氏の父）の妻（上杉清子）の叔母に当たり、互いに親しく付き合いを持つ。政氏時氏父子は元弘建武の頃より足利家に仕える。

一、建武二年（１３３５）乙亥十二月に足利尊氏卿、同舎弟左馬頭直義が新田左兵衛督義貞と相模国箱根竹ノ下で合戦（竹ノ下の戦い、静岡県小山町）する。

弟左馬頭直義と新田左兵衛督義貞と
相模国箱根竹の下において合戦あり
脇屋治部大輔義助義貞弟也の逞兵を撰んで
尊氏卿の陣を討破る尊氏卿の勢敗
軍して乱れ騒ぐ脇屋義助勝に乗て
是を追進らる時に政氏二千余騎を
卒（率）いて義助の備えに討てかゝりけれ
ば佐老木結城等取てかえし政氏とともに
義助の陣を討破て軍功を顕わす

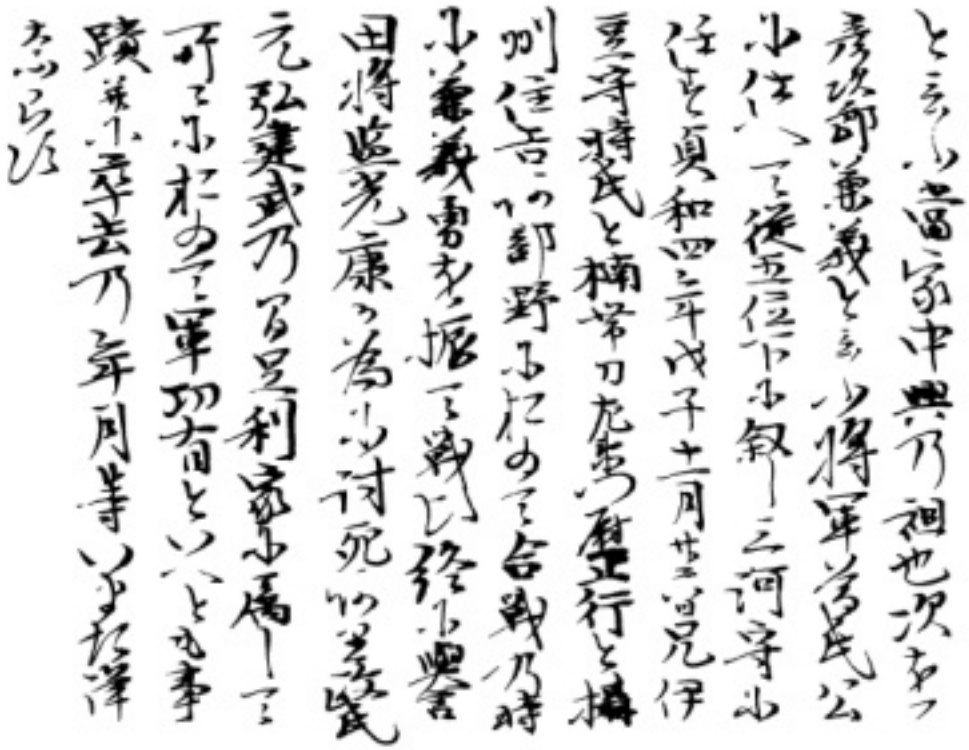
一、政氏父子足利家に属して新田家と
合戦有に新田家の旗幕共に大中黒な
り山名家も新田一流の嫡家たるによりて
旗幕ともに大中黒なり政氏其旗幕
ともに新田家と頒たん為に中黒と引
両を合て三引両を以て家紋とせらる

政氏に二男あり嫡子小太郎時氏

脇屋治部大輔義助（新田義貞弟）は勇猛な兵を選んで尊氏卿の陣を撃ち破り、尊氏軍は劣勢となり陣は大いに混乱する。脇屋義助はここが勝機と見て、更に兵を進める。この時氏政は兵二千余騎を率いて、義助軍の隊列に切り込むと、佐々木・結城の軍も陣を整え引き返し政氏と共に、義助軍を攻めて討ち破る目覚ましい軍功を挙げる。

一、政氏父子が足利に属して新田（義貞）と合戦に及ぶ時、新田家の旗印は大中黒なり、山名家も新田の流れを汲む一族なので、政氏の旗印もまた、大中黒なり。政氏は新田家と区別する為に、中黒と引両は新田家と区別する為に、中黒と引両（足利）を合わせて、三引両を以て山名家の家紋とする。

（上）大中黒、（中）引両、（下）三引両



と言う当家中興の祖也次を
彦次郎兼義と言う将軍尊氏公
に仕えて従五位下に叙し三河守に
任ず貞和四年戊子十一月廿六日兄伊
豆守時氏と楠帯刀左衛門尉正行と摂
州住吉阿部野において合戦の時
に兼義勇を振て戦い終に誉
田将監光康が為に討死あり政氏
元弘建武の間足利家に属して
所々において軍功有といえども事
蹟并に卒去の年月等いまだ詳
ならず

政氏に二男あり。

①嫡子小太郎時氏は、当家中興の祖。

②次を彦次郎兼義と言い、将軍尊氏公に仕え、従五位下に叙し、三河守に任命される。貞和四年（１３４８）戊子十一月二十六日、兄・伊豆守時氏と楠帯(たち)刀(はき)左衛門正行が摂津住吉・阿倍野で合戦の際、兼義勇敢に戦い、遂には誉田将監(しょうげん)光康と戦い討ち死にする。

政氏、元弘建武の頃より、足利家に従い数々の軍功が有ると言えども詳しい事蹟並びに逝去の年月は不詳なり。